

近世志摩国の寺子屋

——鳥羽町栗原家を事例として——

はじめに

一 門人帳よりみた栗原寺子屋

二 寺子屋の師匠栗原家について
結びにかえて

論文要旨

本研究は、幕末期の民衆の文字学習機関として寺子屋教育の実態を、志摩国答志郡鳥羽町の栗原家が経営した事例をとりあげて検討したものである。この鳥羽町における栗原亮休が経営した寺子屋は、すでに拙著『日本近世民衆教育史研究』においても、幕末期の志摩国の寺子屋の事例として、門人帳である『安政二乙卯年 算筆針寺子仕置帳 正月ヨリ栗原』をもとに、手習い子の年齢、就学期間、出身地、教育内容、束修・謝儀の実態を把握したが、本稿はその続きの研究である。

栗原家は、鳥羽藩三万石稲垣家中の「御料理方」を司る下級の藩士である。亮休の父である栗原元平の代に手習いの塾を開業していたと考えられる。その門弟は鳥羽藩士子弟が多かったようであるが、鳥羽町の庶民も共に学んでいた手習塾であった。

栗原勇蔵（亮休）が引き継いで、鳥羽町の子ども達を集めて手習い、算術、

針、素読などを教えたが、その際の手習いの手本とされた内容は、教訓的内容というよりは、むしろ実学的な内容であった。

栗原寺子屋で手習う子ども達の双紙の習数からみて学習熱がたかまっていた。算術の稽古も同様に熱を入れて学習されていたことがわかる。また手習いの時の定座も、向かい合わせの座席であり、土庶が共に学んでいた。

幕末期において、鳥羽町の子どもに手習い、算術、針、裁縫を教えた鳥羽藩士栗原家の側の事情から開業の要因をさぐってみれば、その端緒は、元平の突然の病没による栗原家の危機による一族の結束をはかる必要性があり、根本には経済的な必要性としての家計補助のためと、変革期を自主的に藩士子弟の人材を養成し、併せて庶民の学習熱にこたえていきながら学問・教育への関心をたかめていたことにある。

梅村佳代